
ある喫茶店でのある二人の会話模様

市河りゅう

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ある喫茶店でのある二人の会話模様

【Nコード】

N0339C

【作者名】

市河りゅう

【あらすじ】

タイトル通り、あるカップルの会話のみです。

（前書き）

この文章には地の文がありませんことをご了承ください。

「うん、今日もいい天気だね！ マサト」

「……ああ、そうだな。マリ」

「どうしたの？ 元気がないなあ」

「……それは本気で聞^{マシ}いているのか」

「や、やだなあ、そんな怖い目で見なくてもいいじゃない」

「……ああ、そうだな。初のバイトで入った初の給料が目の前で『スペシャルデラックスパフェ』とかいう3500円もするバカ高いものに消えたからって怒るもんじゃねえもんな」

「……何よ、別にいいじゃない。可愛い彼女におごるぐらい」

「おごる値段にやると思うんだが？」

「もう、わかったわよ。じゃあ、はい、アーン」

「……何をしている」

「はい、アーン。……早くしてよ。恥ずかしいんだから」

「……恥ずかしいくらいならやるな。というかその行動の意味がわからん」

「だって、これくらいのサービスはしないといけないかなあ、と思
って」

「それなら分量を考えろ。なんだその高さは？　ありえないだろ」

「生クリームがバランスを支えているみたいだね」

「……すっげえ危ういバランスだけだな。なんか震えてるし」

「わかってるなら早く食べてよ」

「おれの口は握りこぶしが入るほど大きく縦には開かないんだが？」

「うーん……じゃあわかった。こうすればいいんだね」

「……あのさ自分で食べて半分の高さにしたやつを平気で人に差し
出すのはやめてくれませんか？」

「いいからさつさと食べてよ。このまんま食べてもらえなかったら、
周りから私がバカな子を見るような眼で見られちゃうじゃん」

「バカなカップルとして見られるのはいいのか？」

「私とカップルじゃないやなの？？」

「……」

「じゃあ、改めて。はい、アーン」

「……アーン」

「はい、よくできました」

「……どういたしまして」

「ありがとうとかはないの?」

「何で礼なんか言うんだよ。おれのおごりに対してのサービスなん
だろ」

「うん、そうなんだけどさ……うれしくなかった?」

「……ノーコメント」

「ふーん。顔、赤いよ」

「……っ、気のせいだろ」

「ふふっ、そっかそっか」

「なんだよ」

「べっつに」。そうそうといるでさ、幽霊っっていると想っつ。」

「何だよ突然」

「いいからいいから」

「……ふう、お前ってホントに分かりやすいよな」

「何がよ？」

「お前昨日の映画見ただろ。幽霊が主役の恋愛もの」

「そうだけど……マサトも見たの？」

「いや、見てない」

「じゃあ、なんで？」

「お前ああいうの好きだろ」

「……そんなに私って分かりやすい？」

「さあね」

「……まあいいや、それで、いると思うの思わないの？」

「そうだなあ……いないんじゃないか」

「なんで？」

「なんでって言われても、俺そついうの信じてないし。……それに」

「それに？」

「……いや、何でもない」

「何よそれ。言いかけてやめるとか禁止だよ」

「……お前怖いの苦手だろ。幽霊なんかいたら困るじゃん」

「……」

「……黙るなよ」

「……だって、思ってもみなかったこと言っただもん」

「じゃあ、そういうお前はどんなだよ？　いると思うのか？」

「私？　私はねえ、幽霊がいるかどうかは分かんないんだけどね、いたらいいなあって思うよ」

「なんでだよ、お前怖いの苦手だろ？」

「……笑わない？」

「笑つかもしれんけど話せ、お前がふっかけてきた話だろ。さっきは俺が話したんだから、次はお前だ」

「……どうしてそこで真剣な顔して『笑わないよ』とか無駄にいい声で言えないかなあ」

「お前さ、自分がムチャクチャ言ってるって分かってる？」

「……ちよつとだけ。まあ、いいや。笑わないでね」

「善処しよう」

「えっとね……ほんとに笑わないでね」

「わかったからさっさと話せ」

「うん、そのさ。死んでもまた会えるっていいと思わない？」

「いや、意味が分かんないんだけど？」

「例えばさ、人間って簡単に死んじゃうじゃん。交通事故とかで突然さ。もしそういうので死んじゃったらさ、好きな人にお別れも言えないでしょ？ でも、もし自分がそういうので死んじゃってもさ、幽霊になって、さようならって、幸せだったよって、ちゃんとお別れできると思ったらさ、幽霊がいたらいいなって思ってたんだ」

「……」

「マサトもそう思わない？」

「思わないね」

「……え、なんで？」

「なんでじゃねえよ。何がもし死んでもだ。死んでから幸せだったなんて言われて誰が喜ぶってんだよ。少なくとも俺は喜ばない。もしマリが死んで幽霊になってまでさようならだなんて言ったら俺は泣く」

「……」

「……おれは二度も好きな女と別れなきゃならないなんて嫌だ。……だから俺は幽霊なんかいないくていい」

「……」

「……なんか言えよ。すっげえ恥ずかしいんだから」

「うん、なんか私もすっごい恥ずかしい」

「……」

「……」

「……これやるよ」

「え？ なにこれ？」

「初のバイト代で買ったネックレス。お守り代わりに持ってろ、そうすりゃ簡単に死ぬとか思わなくなるから」

「え？」

「ったく。それにほとんど金使ったっていうのに、そんなパフェなんかおごらせやがって。おかげでかなり財布の中身がさみしくなったぜ」

「……どうしよう」

「あ？ 何が？」

「すっごいうれしい……ねえ、キスしていい？」

「……お前バカだろ？　ここどこか分かってる？」

「バカじゃないもん、だってすぐくうれしいんだからしょうがないじゃん。だから、ねっ、キスしょ？」

「……あとでな」

「ねえ、これつけていい？」

「好きにしるよ。お前にやっただから」

「何よその言い方。あ、そうだ。マサトが私につけてよ、このネッ
クレス」

「なんでだよ？」

「好きにしていいいんでしょ？　私はマサトにつけてほしいの。ね、
お願い」

「……」

「それで、これからとびっきりの恋愛映画でも見てさ……それから
キスしょ？」

（後書き）

なんというか……どうやってお話を終わらせればいいのか分かりません。どうやったらきれいに話が終わるんでしょうか？ 良ければ感想並びにアドバイスをお願いします。

読んでくれた方、ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0339c/>

ある喫茶店でのある二人の会話模様

2010年10月15日21時11分発行